

石井 稜「ジョン・バートンにおける機械と失業」

『経済学史研究』第48巻2号, 2006年12月

石井論文は、機械の導入が労働者の失業の原因となることを論じた著作として知られるジョン・バートンの『社会の労働者階級の状態』(1817年, 以下『状態』)を、生産要素の代替性という考え方を導きの糸として考察した力作である。

過渡的恐慌として知られる不況下にあった19世紀の初頭のイギリスでは、労働者階級の困窮化が問われる状況にあったが、下院などで影響力のあった経済学説は、貧困は国富=資本の増大によって解決されるというアダム・スミス説にあった。これに対して、『状態』は、資本は機械など固定資本と労働を雇用する流動資本に分かれ、両者が等しい比率で増加するとは限らないという主張を展開し、スミス学説に鋭い疑問を提起した。しかし『状態』には、機械導入の効果と資本蓄積の効果との理論的な区別に不明瞭なところがあり、とりわけ資本蓄積に伴う労働需要の減少を論じた「数字例」には問題が多いと指摘されてきた。石井論文はこれらの問題群をつぎのように解明している。

石井氏によれば、バートンの議論は、さしあたり資本規模一定を想定し、雇い主は機械と労働の比率を相対価格の変動に応じて代えるという生産要素の代替性の考え方に立ち、また仮に賃金が上昇し機械への代替が起こり労働者の解雇が生じて、失業者どうしの競争によって賃金が引き下げられ労働者は再雇用されるという生産要素の連続的代替性の認識をもち、むしろ完全雇用を前提したものであった。さらにバートンは、資本蓄積が行われる場合には資本家は

労働需要の増大から賃金が上昇し利潤が下落することを避けるために機械を導入することを考えるが、この場合も、バートンが機械による失業を論じようとする積極的意図を読み取ることは難しいと石井氏は考える。

他方『状態』には、「数字例」を用いて、機械による失業を論じた箇所があり、それは資本家が資本を2倍にすると共に労働を機械によって代替することによって従来の雇用が半減するという事例から成っている。しかしこれは賃金率の上昇を前提しないで機械導入を想定する議論であり、S.ホランダールは、バートンの議論では資本蓄積が実質的な意味をもっていないと解釈している。しかし石井氏は、バートンの手稿の記述の中には資本家が資本蓄積による賃金率の上昇を予想して機械を導入する可能性の指摘があり、一方では社会的総資本の一定を想定し完全雇用を前提しつつも他方では資本蓄積による失業の可能性を排除しない、というバートンの錯綜する議論がなぜ生じたのかを究明すべきだと考える。

元来は機械導入が失業を発生させるとは想定していなかったバートンが、労働需要増大をもたらすはずの資本蓄積が行われても、機械が導入されるならば失業が起こり得ると考えるようになったきっかけは、『状態』刊行の直前に取り交わされたリカードとの往復書簡で資本蓄積が労働者階級に不利になることが論証できていない、と批判されたことだったと石井氏は推定する。出版の迫っていたバートンは、資本が2倍になるとき資本家が生産要素の代替性の考

え方から機械を導入し労働を解雇する可能性を示す議論を『状態』の中で展開してリカードウの批判に応えようとしたが、これは個別資本の増加と社会的な資本蓄積との区別をあいまいにした「性急な統合」（石井氏）であり、そこから「数字例」の不備が生じることになった、と結論づけられている。

審査委員会では、論理的整理がうまくなされていないとの批判もあったが、確かに本論文はいくらか難渋である。しかし、以上のように、生産要素の代替性という考え方を軸に、『状態』の諸問題の解明に挑んだ点は、シュンペーター

による先駆的指摘を受けたものとはいえ、斬新であり、古典派時代の経済学研究に新風を吹き込むものであると評価された。ただ石井氏が、以上のパートンの議論をマルクスの相対的過剰人口論の形成に影響を与えたものと評価している結語については、生産要素の代替性の原理とマルクスの理論との関係など検討すべき余地が残された問題点であることを指摘しておきたい。

2008年5月23日

経済学史学会  
学会賞審査委員会